

高校生と少子化を考える

畑田耕一¹、神戸光歩²、久森洗希³、松下望⁴、宮崎貴一⁵、澤あかり⁶、小川智弘⁷、松宮ゆかり⁸

本稿は、豊中ロータリークラブ主催で開催された教育フォーラム「少子高齢社会を如何に生きるか」(参考文献1)の直後でフォーラムの熱気が未だ覚めやらぬ時に、フォーラムに出席した高校生5名を含む上記の者があらためて少子化について話し合った結果について、司会の畑田耕一が起草・編集した原稿を上記の8名が推敲して作成されたものである。当日のフォーラム参加者のご意見も参考にさせていただいたこと、および、本文の編集に当たりはただ診療所前理事長畑田耕司氏ならびに元大阪大学専門官矢野富美子氏にご支援をいただいたことを記して謝意に代える。

超高齢化と同時に起こっている出生率の低下による少子化は、わが国では深刻な問題である。若者の減少は国力が次第に落ちていくことを意味している。世界のために大きな貢献をする力を持っている筈の日本が若者の数を減らしていくのは、自国にとっても世界にとっても好ましいことではない。少子化の原因として、出産・子育てに対する家族による支援力や経済力の低下をはじめとしてさまざまなことが指摘・考慮され、いろいろな対策が講じられているが、あまり大きな効果は挙がっていない。少子化問題は、また、国の人口をはじめとして政治、経済、文化、教育を含めたいろいろな状況に左右される。結婚・出産を好まない若者が増えてきた理由は、経済的な諸状況のほかには社会保障が充実して子どもが無くても老後の不安が感じられないからであるという意見もある。妊娠・出産にいたる行為そのものを面倒くさがる若者が増えてきたという意見すらある。では、どうすれば若者の人口の減少を食い止めることができるのか。これは、根本的には、国民が、子供を生み育てるのは未来の国と世界のために今を生きる人間が果たさねばならない使命であり責任であることを自覚し認識しているかどうかの問題である(参考文献2, 3)。本稿は、このような問題について高校生と話し合った記録をまとめたものである。

少子化の問題について学び、深く考える機会は総合的な学習、道徳、性教育の授業であると思う。小学校上級から中学校の頃に子供をつくるということの意味を真剣に考えはじめるのは大事なことである。中学校の性教育で、どうすれば、どのようなメカニズムで子供が出来るのか、それを避けるにはどのようにすればよいのか、というようなことを教えるのはもちろん大切ではあるが、それよりも子どもを産むことの意義は何か、なぜ子どもを産まねばならないのか、子どもは何のために生まれてくるのか、という性の根本原理を学ばせて欲しいと思うのは筆者だけではない。

「子供の作り方とか避妊の方法とか卵子の凍結保存とか、そういう物理的な話ではなくて、子供がいたらどんな良いことがあるのかとか、子供が出来たら自分の人生がどう変わるのかとか、子供がなぜ必要かというよりは、その授業を受けたら子供が欲しいと思えてくるような性教育をして欲しいのです」という高校1年の女生徒の意見には、できれば子供を産みたいという強い思いがにじみ出ている。彼女はさらにこう続けている。「若い人たちが子供など作らない、作る必要もないと思っているのなら、中学生のころから、ああ、子供が欲しいな、と思えるような授業をして欲しいと思います。たとえ経済的にかなりの苦勞をしてでも子供を産んで育てたいと思えるような話しが聞きたいのです。そのために多くの人の経験談などを聞く機会がもっとあればよいと思っています」。子供を産むのは女性として生まれたものの責任であるというような考えではなく、もっと純粋で人間味の溢れる思いであると思う。

子供3人を育て上げた女性の次の言葉は、この生徒の問いかけに、一人の人間として、しっかりと応えているように思う。「子供がいると我慢しなければならぬことが沢山あります。例えば、3人目の

¹豊中ロータリークラブ教育問題検討委員会委員長・大阪大学名誉教授、^{2~4}西宮市立西宮高等学校1年、⁵西宮市立西宮高等学校2年、⁶大阪府立豊島高校2年、⁷西宮市立西宮高等学校 教諭、⁸豊中ロータリークラブ事務局

子供が生まれた時、今一番何がしたいかと聞かれて、『麺類をのびない間に食べたい』と言ったんです。子供に食べさせていると、自分の麺類はぬるくなって、伸びちゃうでしょう。その時は単純に熱々のラーメンが食べたいとか、熱々のうどんが食べたいとか、そういう小さなことしか口から出なかった。もっと大きな素晴らしい希望とかそういうものではなくて。子供を産むとか育てるとかいうのは、頭で考えるものではありません。人間として生まれて、女性として生まれて、一生子供を産まないで終わるといのは、すごく勿体ないことだと、子育てを終わった今つくづく思います。出産と育児は、ただ子供のために我慢をし、しんどい目をするというだけではなくて、すごく勉強になるのです。それを通して自分が成長することの方が大きいと思うのです。子供がいることで、いろいろな経験ができて、人間として、女性として、母親として成長できるのです。母親の愛情というのは、ボーイフレンドに対する愛とはまた違うもので、子供を産んで育ててみないと分からないのです。若い人には、女性として生まれたのなら、是非とも子供を産んでほしいと思います。それは何故か、と問われたら、自分でも、何かしんどいことばかりで、何が良いのかな、と思ったりするのですが、それは理屈ではないし、口で説明するのも難しいのですが、とにかく、男性には味わえない女性ならではの産みの苦しみも含めて、子供に対する愛情を持てるようになるということなのです。それを感じないまま、経験しないまま、死んでいく、人生を終えるのはすごく勿体ないことです。私は、子供を育てるのではなくて、子供に育てられるのだと思っています」。母の強さ愛の深さは、この子供に育てられて成長し生きてきた結果であるように筆者は思う。

高校の頃から母になる心構えをしっかりと持っている生徒もいる。「私は子供が大好きです。子供は本当にかわいいなと思います。自分も四人兄弟ですし、兄弟が多い方が楽しいと思います。それで将来はできるだけ沢山の子どもがほしいですし、子供を産まない人生なんて考えられません。女性しか経験できない出産という幸せを経験せずに終わるなんて絶対に嫌です。そして、みんなそうだと思っていました。ところが、友達の一部は子供はいらないと言います。彼女にはやりたい仕事があり、子育てよりもそちらを優先したいと言うのです。それも一つの生き方なのかなと思いました。少子化が続く日本の未来を心配して、子供を生みやすい環境を整えようという努力がなされています。でも、私は、『子供が減ると困るから子供を産む』のではなくて、『産みたいから産む』という社会になってほしいのです。もっと多くの女性に、子どもを産むことのすばらしさや、子育ての楽しさ、そして何より子どものかわいさを伝えていくべきだと思います。それで、私も、将来は結婚して子供を沢山産んで、その素晴らしさをたくさんの女性に伝えられる人間になりたいと思います」という女生徒の体の中には、上記の子供3人を育て上げた女性と同じような心が宿っていて、母親になる準備が出来ているのであろう。

高校生は、少子化の問題と教育との関連についても強い関心を持っている。出産・育児の経験の無い教員からの性教育よりも、子育てに携わっている、あるいは携わった人々の経験談を聞く機会をもっと作って欲しいという彼らの希望は既に述べたところであるが、このような外部講師による授業を高校教員にも受けて貰うことや、高校までの間に何らかの形での子育て体験授業を実施すること、たとえば家庭科・総合的な学習の時間等を利用して幼稚園・保育所訪問を行い、幼児とのふれあいを持たせることなどが提案されている。勿論、学校教育だけが全てではない。むしろ、家庭教育における親の役割の方が重要であるともいえる。「子どもを持つことの苦勞と素晴らしさを親から子へと伝えることが生物界における種の繁栄の底辺を支えるものである」という意見は生きることの本質をつくものである。子供の教育費用についての親の苦勞は高校生もよく理解しており、高校・大学の授業料の無償化は彼らの望むところであり、少子化と経済的問題との関連を高校生が深く考える切っ掛けともなっている。

出産・育児に関わる社会的環境についても、高校生はいろいろと考えを巡らせている。産前・産後の特別有給休暇、職場の保育施設の設置とそれらへの公的援助などは彼らがかんり強く求めているところである。これらは既によく言われていることではあるが、高校生から聞くと、あらためてその必要性を強く認識させられる。「子供を産むということは未来への一つの社会貢献なので、これに補助金を出し

て支援するのは授業料の無償化とともに非常に大切なことだと思います。このような未来への投資を惜しんで、日本の、あるいは世界の大きな発展の芽を無残に踏みつぶしてしまうようなことだけはして欲しくないのです」という高校生の願いを真摯な気持ちで聞こうではないか。

子育てには、どうしても親以外の支援が必要になる時がある。それを乗り切るための知恵と工夫が求められる。昔は三世代同居が普通であったので祖父母による支援が容易に得られたし、子供の数が多ければ、上の子が下の子の面倒をみるのが普通であった。家族以外の地域の人々による支援も多少の気遣いは要るものの割合容易に得ることが出来た。最近では核家族化と勤務先の問題もあって、それぞれがかなり遠く離れて住む傾向が出てきて、保育所と幼稚園の一体化や上に述べた保育所・職場の保育施設の充実と従来のものよりは少し範囲の広い地域支援ネットワークの構築が叫ばれるようになった。高校生たちもこのような社会的子育て支援組織の充実は求めているが、彼らは三世代同居生活にも強い興味を示している。今の大人が核家族化を見直し、企業も人員の配置転換の方法をよく考えて社員の三世代同居生活の可能性を高める努力を続け、住宅の構造の問題も含めて三世代同居生活の良さをよく考え、それを日常生活に生かす工夫をする時が来ているように思われる。これが少子化問題の解決の糸口になることは間違いなからう。多くの人と支え合うことによって、元気をもらい、生活の知恵を身に付け、困ったときには助け合うというネットワークの広がりや、子育てだけでなく、高齢社会にも、また地域における学校・社会教育にも大いに役立つ筈である。

ただ、ここで一つ問題になるのは、教員、保育士、看護師などの免許を持たない人が教育、保育、介護などに当たるということである。大学出たての若い保育士さんの知識よりは、何十年も子供を育てたお母さんに預ける方が安心という人もいるし、特定のテーマに限れば教員免許が無くても永年の社会経験を基にして立派な授業の出来る人もいる。お互いに信頼関係を保ち、知恵を働かせて、システムを運用したいものである。そして、偶に起こるかもしれない事故の問題は出来るだけ保険による解決を図るのが得策ではなからうか。

最近、社会的に重要な問題を議論するときに、小学生上級から高校生までの生徒に参加して貰うと、斬新で興味深い意見が聞けて、討論がはずむことを強く感じている。茲に報告した小さな集まりも、その種の会合の一つであったことを最後に述べ、参加者の一人の高校生のフォーラム参加についての言葉を括弧に記して筆を擱く。

「職業、年齢、国籍の違う方々と一つのテーマについて話し合うというのはとても貴重な体験でした。少し緊張しましたが、いろいろな方の意見を聞いて、疑問を持ったり、共感したりしているうちに自分の考えがまとまっていくのが感じられました。また、自分が正しいと思っていたことと反対の意見を聞くことで、自分の世界が広がっていくのが分かりました。今までは自分が見ているものが真実だと思っていましたが、観点を変えると、いろいろなものが見えてくるのだなと実感しました。今日の少子化についての議論は本当に楽しかったです。自分と違う意見を持っている人がたくさんいて、自分の中で熱くなることができました。有難うございました」。

参考文献

1. 国際ロータリー2660 地区豊中ロータリークラブ主催のもとに2013年1月26日に開催された教育フォーラム「少子高齢社会を如何に生きるか」の報告書、2014年12月発行予定
2. 岡田伸太郎、少子化をめぐって <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/shoshika-okada.pdf>
3. 畑田耕司、畑田耕一、「超高齢少子化社会を如何に生きるか—医療と教育の両面から考える— (ISBN978-4-903247)、<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/shuppan.html>